

北辰會雜誌

第九十八號



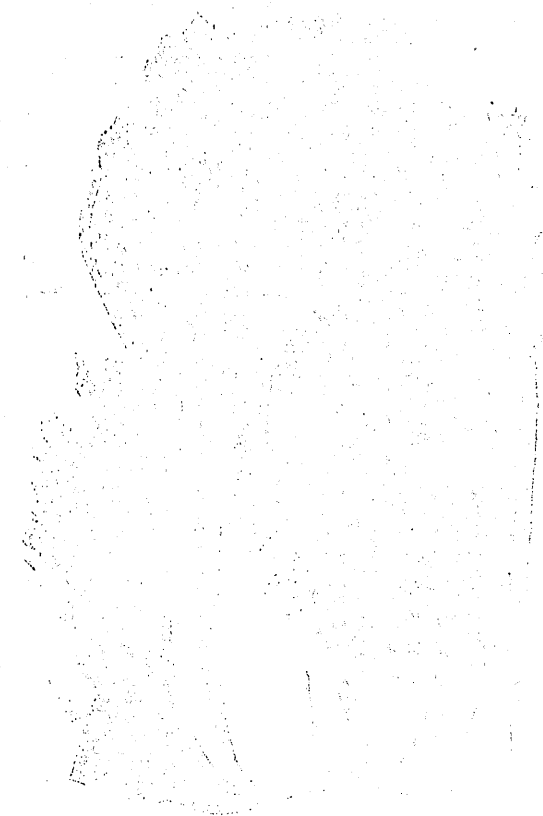
1923

第四高等學校北辰會雜誌

大正十二年十二月二十五日印刷發行

第九十八號

第九十八短歌號





小 さ き 實

鴻 巢 盛 廣

神の國すめらが御くに古きみちとなへを行か
む聲はかるども

わが祖おきなのうまれし死せし葦原あしはらの土の香かげば
うごく男おとこころ

わかうごの思索のいづみ掬ぶとき我また若ゆ
幸ある身かな

人の子にわが拙さをつたへしをなげかふ夕べ
雨しと、降る

こゝろせよ汝が春は逝き細き枝に花色なくて
小 さ き 實 成 る



老といふ手してなでなば胸の疵癒えなむそれ
もかなしからずや

走り行く電車かしましごうしても今日は講義
が引き立たぬかな

門を入りて砂利ふむ音がいつになく脳にひび
きて氣になる日かな

何となく足らはぬこゝろ今日も暮れぬ求むる
何と我も知らねど

氣味悪く夜鴉の群しはなけば遠いかづちの響
き來るかも

すさまじき夜の嵐は吹き絶えてしごまの朝を
雪降りしきる

庭の面はまだあけやらで椿葉にたまれる雪が
たゞ目にしろし

花うばら一つのこりて冬淺き庭しろくど雪
降りにけり

すさまじく嵐吹きわたり竹むらのひたとなび
けば遠の山見ゆ

あなさびし山川のいろ町の色たゞ何となくさ
びし北ぐに

山陰まの山なみかくす朝あぎりは冷やかにわが蚊
帳ぬちに入る (以下五首山陰旅行作)

涼風は入江に満てりまひづるの四方の山々た
だみざりにて

歌の國八雲立つ國こゝに來て木くさごとごと
なつかしきかも

穂に出でし澤田の草稻にまじらひて風になび
くは惠具にかもあらむ

與謝の海やおし照る日かげかしこみと鷗も波
につばさやすむる

ふるき歌稿より

木村青湖

すいすいと赤き蜻蛉の飛び交へる空の青きが
佗しかりけり

出羽町の練兵場の草を刈る女の鎌に白き秋の
陽

醫王山白く輝き冬枯の空にし立てば寂しくも
あらむ

何もかも打ち捨てて心一ツをば抱きて冬に入ら
んどぞ思ふ

しみじみと涙流せる感激の思ひ出なごもわび
しかりけり

犀川の鐵橋を渡る汽車の音懐しみ聞く冬の寢
ざめよ

冷え冷えと簷をめぐりて秋の雨降れば文なき
書かんと思へり

或る夜遂に鳴く音をはたと止めたる虫をあは
れみ草に放てり

秋が来て常に思ふは谷中なる杉に懸れる晝の
月かも

忘れたる思ひの胸に湧き寄する電車の中の秋
のたそがれ

佐渡のうた

小木曾三郎

荒海もこの小島の磯に来て永世の玉の色に
沈めり

北の方^{きたがた}はるけき海を限るなる岬^{みさき}の影よ心さび
しき

清らなる島の縁の影ひたす此湖^{みづうみ}の風はつきせ
す

何人の寺ぞ木立の奥深き芝生にうすき夕日影
かな

相川の街^{まち}の良き石白き石さびしき島の清らな
るつと

磯山の草の葉並にひかひかと夕日落來ぬ我居
るしばし

晝寝して覺めて歩けば我旅のいや耐え難く静
かなるかな

一しきり風の渡れば沖津波青々として遠く鳴
るなり

波の音又聞ゆれば丘の道こひしき人のおもか
げに立ち

遠き世の若き流人の心より初秋の風佐渡に吹
くらし

奈良三首

なつかしき十輪院を訪ふとして道に吾聞く奈
良山の虫

幾秋を経にけむ山のもみじ葉の松に映ゆるも
なつかしき奈良

春立たば古き薬鑪のかほりせむ奈良の裏町の
くすりやの辻

雑唱

山の樹の黒く隈なすさみしさよ小夜更けて出
づ月の光に

ごほごほと水鳴る音し小夜中の月は若葉に止
りにけり

月遠きかの大空の一かたよ如何にこひしき色
と青むも

牛方の音聞ゆれど夜ふけて歸れる牛の音のか
そけさ

春深き古き都は浄土寺の村居しづけきうぐひ
すのこゑ

春深き古き都の空なれと行き來の雲もはるけ
くは見し

喜びも唯かりそめの聲とのみ響きて消ゆれう
つろ心は

うつし世のうつろに似たる淋しさを知ればや
我も人をあはれむ

今宵又いねむとすれば別れ來し母の眼を想ふ
さびしさ

高野山

大河良一

朝日さす尾根の薄の白き穂は風にゆれつゝう
す光りせり

夜深く耳をすませば裏山に樋を通ふ水のしつ
くする音

鉾杉のほつらにそゝく冬の日の光りとぼしみ
くれむとすらし

耳につくしづくの音のかそけきにひそまり深
き夜となりにけり

雪

すがれたるあぢさゐのうれにふる雪の夕ふり
しくはひそかなりけり

あぢさゝるに夕こる雪のふりしげみ國おもひわ
く夜となりにけり

夕寒くふりつむ雪はひそまれり手紙をみつゝ
わが眼をつぶる

故里より栗の實をおくられつ

故里の栗の實はみつ思ふことほのかなれども
いやつきかたし

ねてはめば栗の實うまししみくど國への事
を思ひつゝねむ

栗の實のつぶらなる實の一つにもわかすぎし
日の面影のあり

秋山の栗の林に夕日さしたらちねとふむその
下かげを (追憶)

懷 郷

(一)

たらちねをさかり申してほごへねば夕かたま
けて泪わくなり

ちゝはゝの國をさかりてうつそみのわれやひ
そかにもの思ひをり

おのつから夕さりくれば思ひけしちゝはゝの
事はらからの事

(二)

この朝け秋雨さむし思ふことたらちねのいま
す國のはろけさ

かたむける鶏頭の葉に小雨ふり寒くしなれば
思ふふるさと

はしけやし童男童女輪をつくり吾かつてせし
事を遊べり

木津の濱

まかなしき思ひこそわけしげみたる夏草かげ
に蝶のひそめば

萱草くぐらのしげみに通ふ日の影のうつらふ見れば
夏たけにけり

早春の小雨にぬるる竹村のたゞにひそまるく
れちかみかも

夜釣の火水にうつりてきゆるまの薄の影のな
がれたるかも

こほろきと馬追とゐてなますます林檎畠は夕
月夜なり

夜 道

大 島 文 雄

町を離かれて遠くなりたり時ありて驛の汽笛を
うしろに聞くも

土手をおりて石ころ多にほぼりき新墾にほぼりの道に瀬の音は
とほくしなりけり

ひつそりと木原の中を出でしかば月かげまね
き明さにすくみつ

月のかげ川ぞひみちにここだ積みし圓石は白
くかがやけるかも

道のべにひそまりかへる窓の灯かげ障子に物
のかかりてありけり

山かひのこの真夜中のひそけさにおのづから
わがあゆみとごめつ

夜くだちて山かひをゆきつ顔のうへに薄はな
びく夜風の寒さ

風にむきてひたあゆみゆく薄むら穂並みのう
へにいさり灯は見ゆ

夜風たえて物の音しづまる山のうへややにか
たまるうろこ雲かも

秋のおもひ

西堀 一三

秋朝二首

朝まだきしづあゆみよる架^は稻^さうらのひえびえ
としてたてる朝霧

秋の朝まだきのみちにおくつゆにぬれてしみ
くる紺の足袋先

秋雑詠

夕時雨はれあがりきてほのぼのとあたりあか
るみいづるそば畑

ほのかにも稻のかわけるにほひをばききつた
へゆくつかれたる身を

小雨ふる野中にくゆるもみのからぬれてをあ
ぐる細きけむりを

秋のおもひ

わかれきてわびゆく野らの道ほそみあゆみわ
けゆく秋のくさばな

夕蟬のこゑしづみくるたそがれはこころひそ
かにおもひてを居り

ほのぼのとあひよりにつつのぼりゆくこころ
たへつつみつるけむりは

ほのかなる筆のにほひをいとをしみたまゆら
こころむなしかりけり

ひそやかにむつみてときをすごしつつやがて
かそかにこころかよふも

つつましくひをともしつる夕にけのたまゆら
のみはおもはざりける

ともすればそれとしもなくしづみますますがた
をみつつこころきめにき

思はるる身となりてより落髪のひとすぢをも
ぞいとひそめてき

冬の日は障子のかげのあかるみにあひよりて
こそ語らひしかな

籠居三首

訪ね來しひとを侘ぶるはさみしきとひそやか
にしも思ひいたりぬ

訪ね來しひとありければはれやかにものを言
ひつつすごしたりけり

いささかのよろこびごとに足らはひてやすく
すごせるひとひなりしか

紅の花

本林 鋼治

皆友は衣を更ふる初夏を亡母の寫眞に泪する
かな

山に来て林檎をむけば強き香の指にうつりて
春の陽暑し

もどめなはかなしみますと知りつゝも紅の花
買ひし夕ぐれ

蠟燭の灯はゆらゆらと夜は更けぬ友のねむり
をさまさじと思ふ

重重と雲よせ來たり風寒し歳暮近き街人足早
し

旅にてよめる

大澤 衛

ちちのみの父のみかほを七日見で旅にしあれ
ばこころこひしも

歸る帆はつくづくこひし旅にしてむれ帆の風
にかへり來見れば

山かひの細田をすくと鍬振れるかそけきかげ
はおうなならしも

鮎の腹あさき川瀬にひるがへりしろじろと見
ゆこのゆふかげに

何食むやうるほひ苔の蒼底にをやみなく跳べ
る二羽の小雀

病みてあれば縁さきに来てわが顔をしきりに
のぞく雀うれしも

川端にけふもかがみて思ひ入る水のごとかれ
われがいのちは

跡のつきし道をこのますわれひとり深草野^ん
きひたに歩むも

窓の邊のさんしよはうれし夏來れば日かげな
れどもつよくにほへる

冬さればうとくも訪はず秋の日にあが屢訪^{しよさ}ひ
し川しものはら

石掘るといしほりあまた瀬に立ちてこのさむ
ぞらに肌をぬぎをり

秋に詠める

岡 良 一

したしきものらうちよりて

蓄音機かなでたりし夜に 二首

部屋すみに美^はしきしらべをかなでつゝこれの
からくりひたまはりをり

このしらべ寝いれる君の夢にいりほのぼのと
しも咲きにほふらむか

おさなきものをつれ虫捕らむとて 三首

蟲捕ると吾兒の手をとり丘の邊の夕しづもり
に草分くわれは

向つ峯に月しろにほふ夕はやを千草ははやも
ぬれそめしかな

蟲を得なくなぐさめがたみ丘の邊の草にぬれ
つゝわれたちまよふ

病める友に侍して 三首
君を看どり寝ねやらず聴く離れ家をめぐりし
たゝる秋雨の音

病みやつれ肉のおちたる君が頬にかなしから
ずや笑みくぼのわく

つかれたる君が笑みかもかたほゝになごむえ
みくぼ消えやらなくに

秋を行きて 二首

裾寒く丘行く路にもろ草は穂をたれしまゝ霜
枯れにけり

ひとすぢのこみちはふかうおち葉して疎林あ
まねくあかるみにけり

寺院にて

太田辰夫

太と柱陰いと暗う晝の廊は五百の羅漢なみ静
まれる

地のほてり絶えて夕は風をあらみ能登路はる
かに鶴むれ來る

曉 嵐 二首

ひた吹きに風つのもり居り天の原雲のみだれま
日出でんとすらむ

曉のおのれいとほしみ川沿ひに並樹路行けば
風鳴りいたる

雨ふるか峠のあたり煙れるに傘一つ見え遂に
動かす

燈心草

瀧田貞治

竝木道急ぎすぎなん野分ちがやふく茅薄ちがやの那須野戀
しかりせば

ひからびし木葉ひらひら降る中にあはたゞし
かり小鳥なく聲

退院はうれしかりけり細りたるかひなにうぶ
毛きは見ゆれども

あら壁の日向にこゝだつごひよる人の真中に
猿踊りをり

氷雨ちまたふる街ちまたに立ちて逝きませし母のかむばせ
しばししのべり

占

中野重治

大船の津守が占に告らむきはかれてを知りて吾が二人れし 大津皇子

夢に切めて見えなむと思ひし夜な夜なの近く
居し夜は見ざりつるかも

なにとせむまなこ移せばとほきとほき青空の
奥の一点の雲

日斜くればその身消ぬがに音に出でゝ人泣き
そめぬ今はたへかねつ

相よりてくらやみのなかに居りしかば吾が手
かすかに人の身にふれつ

風吹けばたゞに逢はむと手をのべつ心かよふ
といへどせつなく

今日の逢ひいや果の逢と逢ひにけり村々に梅
は咲きさかりたり

人群のすみにひそまりてかすかなる女ごゝろ
を見せたりあはれ

水はやきこゝの船橋うちわたりいづこへ行か
む寒き春日に

室生にはごむの丹の芽もつのぐみぬども角
にもなりなむと思ふ

物心いまだはつかぬをさな兒のをさな眼は見
るにたへがたし

まかなしく吹かれてを居る夜の風に螢ひかり
て流さるはげしく

玉きはる細りし命もちたもちひる牀に見るを
だまきの花 (かぜ熱三首)

乾きたるこれの唇にをだまきの花今よ咲きぬ
と人に告げましを

をだまきの花咲きたりと今もかもうつゝの聲
にわれはもらしつ

天つ日のあさけの光さしたれば籠の小鳥は啼
けりするごとく (秋二首)

木ぬれには朝かせわたり小鳥啼けり物にたと
へて吾が歎かざらむ

光を戀ふる

内方新之丞

病むわれを母のなぐさめむとさしし花夕とな
らず枯れしほみけり

1

あなかそかところまごろむたらちねのひた
ひゆ汗の玉おちにけるかも

はうえよ何をととへば齒いれなと齒齧あら
はしさびしく笑ませり (たはむれに何かおくらむき)

老ぼくに負はれて錢湯にゆきしころわれをみ
つめし童女子のまなこ

2

けふもまた餌をひろはず眼とぢ病めるめんご
り動かむとせず

よろよろとよろめきつゝも病む鶏の音たてゝ
のむ行潦のみづ

病む鶏の日向もとめつもとむる間に秋の日影
はかぎろひにけり

幽かにもはたはたするは蝙蝠のかけまふ音か
日くれたるらし

日照雨ばらばらふればかそかにも眼みひらく
白猫あはれ

3

まなかひの土塚の色の白きさへ目にしむころ
となりけるかも

くろぐろと雲のうづまくなたよりこんこん
狐のなき聲やます

よこぎまにたばしる霞はたどやみてはとわ
れとは顔見まもりぬ

雨はれてふと鼻のなきたればひたにおき出で
飯はみにけり

さむざむとさどなみ光る溜水たづみの上をひねもす
さびしみ眺めてゐたり

ひさびさに光さし入る朝明かも鈴かねの音いよよ
しみわたりくる

4

日向べにやせ細りたる足なでうたうつし
みをいとほしみけり

病みてよりふとん重ぬるひとかさねまたひと
かさね冬は來にけり

ものにふるる 能澤 五七

夕寒くかげりきたればあちこちのそぎえの山
の雪光りたれ (野にて)

杉かげに咲く庭梅のいやしろく冷えのしるけ
く夕づきにけり

雑木山に今朝ゆふりつぐ春雨の夕かたまけて
明るみにけり

葦原のさ秀らゆららに飛びとびて小鳥はなか
ずひるのしづけさ

湖ぞひの夕葦原の秀のさゆれ淋しとみるに鳥
たちにけり

塚ごしに見ゆる隣りの百日紅盛りとなりてす
でに久しも

向土手に風わたるらし曼珠沙華陽にかゞやき
てゆれつつは見ゆ

こゝにしてかへりみすれば風そよぐ簾なかに
ゆるる曼珠沙華赤し

ひとり居の晝をさぶしみ檜葉しぬぎふる秋雨
にしたしむこころ

氷わると眞夜のしづみに起きいでて厨にくれ
ば月のさしをり

すぎがてに襖の蔭よりうかゞへば父はしづか
にねむり給へり

ゆふかけて

窪川鶴次郎

若葉木のしげみにゆふべ灯のみえて公園の坂
をのぼりゆくなり

ともしびのいまだつかざる夕やみに家をめぐ
りてむれなく蚊のこえ (ふるさとのいへ)

光なきゆふひ雲まにほのみえてこの高原に虫
なくきこゆ

はれさむく露路ゆふさればあそびごはやがて
かへらむさわぎをあぐる

月よみの光さむけくたもとほる命かなしけれ
もくせいかわる

あかり消しさよのおどこにひそまればまつ風
さびし吹きてやみたり

やまかひの坂しもとほくほすゝきのほらさひ
かりて村の家見ゆ (ふるさとのやま)

みにくかれどもだしふかかろをみなごの針は
こぶさまはさびしと言はずや (いもふこ)

かないは (四首)

ふぶきあるる北の海なれや冬くると蟹がいへ
むらいへがこひせり

まなかひのおほ波くだけおさまればたまゆら
きこゆ千波の遠音 (こぼ)

きはひ漕ぐかこが艘のさき波しぶきすゝみが
たかり岸ちかみかも (沖船より材木をはこぶ)

大島 雑詠

矢 部 忠

眞青なる大わだつみの果てに見ゆわがゆく島
は霞みながらに

朝まだき三原の山に登らんと仰げる空に御神
火の燃ゆ

心のうごき (舊作より)

水鳥の影うすうして琵琶の湖曇れるまゝに暮
るゝ悲しさ (歸省の際)

哀しきはわが思ひ出に父上の悪しき性質のみ
うかびくること

讀みわびてそつと見やればはゝそはの母は黙
して衣縫ひてあり (もた)

待針

藤田貞次

五日夜も降りつゞきたる長雨のふとはれしと
き雀なきけり

さらさらと竹の葉の上に霰ふり月おぼろなり
竹藪の上に

夜おそくすれちがひたる牛ひきの牛のにはひ
はするごかりけり

むかつ峰にさ霧降る見ゆ山の根の青むぎうす
くうるみたるらん

上枝より露たへかねて落ちしとき下枝ふるへ
て露うけにけり

遠く遠く涸れたる河のうす白くつゞけるみれ
ば心かなしも

しめやかに霧はひよればそと濡れて杉葉かそ
けくゆれにけるかも

しとくくと雨ふる藪のくらやみに枇杷の葉う
らのほの白く見ゆ

日がさせば障子ひとゝこあからみて落つる雨
だれかげとなり見ゆ

光ふる本堂の縁をあたゝかみ人夫らもだし飯
をはみをり

せゞらぎにひとすぢの藁動かされ動かされし
て流れ行きけり

行旅雜詠

北上四郎

丈を埋む叢竹わけつ深山ゆき紫うれし野葡萄
の房

湍りたつ谷間の淵に渦まきつ朽葉は亂れに巴
に走る

望月や樅の葉蔭を離れ出で仄かに照らす白樺
の森

吹く風に千草は枯れぬ深山みちひとり淋しく
龍膽の咲く

大黒部そのみなもとに來て見れば蓮華の山は
雪つみにけり

茶菓の歌

宮地義亮

茶菓の實のほのあからみてうれをるに夕日幽
かにうすらぎひかる

ふかふかと細葉しげらふ茶菓の木のみ枝いさ
ぶり雀とびたり

竹村 三首

冷えしめる竹村に路はいりまがりおのづから
つかれを忘れけるかも

竹村の奥にほの明く夕日さし音しなれば心
さびしも

身にせまる冷えおぼえつゝ群竹の直ぐ立てる
路をゆきにけるかも

第九十八短歌號目次 (いろは順)

小 さ き 實	鴻 巢 盛 廣
ふるき歌稿より	木 村 青 湖
佐渡のうた(遺稿)	小 木 曾 三 郎
高 野 山	大 河 良 一
夜 道	大 島 文 雄
秋のおもひ	西 堀 一 三
紅 の 花	本 林 鋼 治
旅によめる	大 澤 衛
秋によめる	岡 良 一
寺院にて	太 田 辰 夫

燈 心 草	瀧 田 貞 治
占	中 野 重 治
光を戀ふる	内 方 新 之 丞
ものにふるゝ	能 澤 五 七
ゆふかけて	窪 川 鶴 次 郎
大 島 雜 詠	矢 部 忠
待 針	藤 田 貞 次
行 旅 雜 詠	北 上 四 郎
茶 萸 の 歌	宮 地 義 亮
カ ッ ト	中 野 重 治

部 報
編 輯 後 記
十一度北辰會費收入支出決算書

附録部報

■洋畫會について

豫告しておいたまほりに、陸上運動會當日こそ翌日に亙つて洋畫會を開いた、こゝしで第八回目だ、進歩したと賞めて呉れる人、けなす人、それは見るもの、勝手だ、たゞこの作品にも若者の一徹な眞摯があふれてゐることを認めてもらへばそれでいい、出品者に額縁をつけることを求めた故か、作品の数は去年よりは少かつた。見に来る人も去年ほど多くはなかつた、けれど本當に繪をなつかしみに繪を味はうとする人の親切な氣持は、數多い眞面目な批評となつてあらはれてゐるのを見るのは嬉しい。終りに色々手傳つて下さつた人に感謝します。(密田、竹村)

■從軍記

秋になると發火演習がある、からりと晴れた青空の下でとはなくて、薄暗い小雨にしようぼめながらだ、今年もそれを免れなかつた、

十月十一日、南軍の從軍記者となつて出征する貫つた想定はまづかうだ。

われ等の南軍混成旅團が、金澤市を占領しやうとして今日の曉方に鶴來の方から進んで來て見ると、敵がいつか犀川鐵橋附近から古保の方へ陣地を布いて寄らば撃退しやうといふ勢である、そこでわが南軍學生大隊が太田、八日市、新保あたりに展開して敵陣地の右翼を突崩し天晴殊勳しやうといふわけになるのである。

想定がすんだら愈々肉弾戦にうつるわけだが何しろあの雨だ、一枚の外套を脱いだり着たり、解いたり疊んだり、東の空に薄黄な明るみが浮ぶかき見る間に灰色の雲が冷たい大粒を叩きつけて來る、敵兵の顔を見ない中に蒼ざめた死相をあらはす臆病者さへ出て來やう始末だ、抜き離れた銃劍の尖端にぼた／＼滴れるのは刺した敵兵の血ぢやなくて、雨の滴に油の滴、それに涙も少々。可哀や、枯草に埋つた田川を畦と間違へ腰から下をびつしよりにしながら武者震ひする手合もある。

ばつばつ、白い煙が見える、愈戦争だな、赤く膨れた指先で銃の臺尻をつまみながらぼんやりと前面の銃聲にき、ほれてゐると銃聲の馬が雨空の中に駆け入る様な勢で飛んで行

く、大隊は疎開した、散開、射撃、何度引金をひいてもごんごいはぬ、索杖をさし込む索杖もそれつきり出て來ない、肉弾だ、肉弾だ、雲間からのぞいて青空の影が白刃の上に微笑してゐる……休戦喇叭、之れで戦争ごつこは止めた。

戦ひ疲れた兵士の群は百姓家の美しい土間に蓮をひいて寝そべつた、頭の上に無花果の薄縁が、乳白の唇をひらいて眺めてゐる。

凱旋したのは午後三時を過ぎてゐたろう、戦禍に汚されぬこの都は相變らず美しくつて電車がごつ／＼と唸りながら通つてゐた(密田)

■講演部報

震災のため、そゞくさとしてゐたの、委員の物すごいサボリ方のために例會すら豫定の半分も出來なかつた。こんな仕事をお互につ、かけ持ちにして居る様では、とても出來つこが、ありやしないにきまつてゐる。九月二十九日にやる筈の公開學術講演會が、やつと十一月の四日にやる始末である。

震災に關する保険金支拂問題

教授 松山康民

歴史上より見たる日本の政黨

本校出身 福井判事 宇野耕純

文化運動の經濟的一小觀 九鬼岩男

餘りに外面的 安川清孝

ハムレット性格解剖の一斑 瀧田貞治

宗教的内觀の根源 倉内孝

行為に實現せらるゝ當爲 沼田龍太郎

英雄論 石田富平

一休學術講演云ふ事と一人十五分間と云

ふ制限との矛盾である。到底兩立しがたい問

題にちがひない、だしぬけに顕微鏡をのぞか

せる様なものだ。成る程随分はつきりしては

居るが扱てパクテリヤか葉の細胞が、蜻蛉の

眼玉がまじり見當がつかない。……今度の

催しについては山本先生にさんだ御迷惑をお

掛けした事を詫びます。

十一月八日、川村理助氏は「未發の中」云

ふ演題のもとに、氏の体験生活より確實に握

りしめた人生觀宇宙觀を懇切に述べられた。

そして純粹經驗をその根據とした。聽衆立錫

の餘地なし。裨益した所大なりと思ふ。

十一月十日、夜六時から市内中等學校辯論

大會を開いた。四高講演部のグラシなさが各

中等學校までに影響して居ぬとも限らない。

感激に燃え上る青年學生だつたら、オリンピ

ヤ原頭でなされた雄叫びの様に力強いものが

あつても、よきさうなものである。

兎に角これ等講演部の墮性は一新されなく

ればならない。この缺陷は現在のやり方を改

めないうちには永遠に續くを見るより外あるま

い。筆を擱くに當つて特に一年の瓜生稻波が

部のために色々助力して呉れた事を感謝して

おく。(たきた記)

◎四月中のこと。

九日から、第一學期の練習を始めた。道場

には、過去三年間に都合二十二人を屠つた藤

好大將、二刀流の須賀氏、難劍を以つて知ら

れた片岡氏、及び、儼然とした中にも、愛情

に満ちた島崎名マネーシヤの姿もなく、唯

三年になつた許りの大谷大將、土井マネーシ

ヤ一始め、二年になつた許りのものと合せて、

十五名の部員が、古賀師範を中心に集つてあ

つた許りであつた。

劍道部々報

試験終了後、三月二十四日迄、合宿して練習を續けたので、異中休暇を終へて始めて練習する時のように、その日の練習に於て、問合が解らなかつたり、或は、体のコンディツションが狂つて居らなかつた。そして、皆は豫期に反して緊張してゐた。

三月の合宿の時に、受験生の中から勧誘したものの、中、どれだけパスし得たであらう。三高には、精銳が可成り入つたさうだし、六高にも、五十有餘名の新部員を迎へたさうである。けれど、私等は、私等の勧誘し得た少数と比べて、決して悲觀しませんでした。

十七日練習後、宮地の二階で新入部員の歡迎コマを開いた。部の精神、四高劍道部のスピリットと言ふことについては、逆も説明出来ないが、劍道部々生活には生命が流れて、それに水溜むものは、心の中に、つきせぬものを覚えると言ふ事實が、舊部員の体験から紹介された。新に入つたものも、血も心も、若々しさに漲る青年である。新進の、しかも燃ゆるが如き彼等の熱情は、何事かに熱中せればおかない。茲に、若き同志の胸に共鳴して、愛部の赤心、尊き献身は誓はれた。

古賀師範は勿論、市内各師範も殆んど連日

來援せられて、私等と共に苦しむ、遂には、

私等と共に尻古垂れて仕舞ふ練習は、七月迄

續いた。

下旬に行はれた、新寮生、新入生歡迎試合

は、例に依つて、兩試合とも舊寮生、舊生徒

側の勝となつた。併し、これ等の結果は、私

等に何等の自信をも與へなかつた。

先輩は、四月下旬頃から、東京京都からは

言ふ迄もなく、遙々九州からも來澤せられて、

私等の進歩を、勵ましの爲には、それこそほ

んさうに、力ま術のあらん限りを盡して下さ

つた。

又温情溢れる、嚴肅な激勵の諸先輩からの

手紙もあたられた。

その度に、私等の心線は、ごうして、美妙

な曲を奏でないで居らう。奏でる曲は、ガル

バルターの愛國心にも比すべき愛部心と、機

性の精神である。私等の若し溢れる血潮でえ

がかれた、グンテの神曲も及ばない、美しい、

尊い曲である。始め暫くは、或は充實した生

活を送り得ないかも知れない。けれども、先

輩の温情を思ひ、校友八百の眞情を思ふと、

ひびり、理窟通りの、しかも、空虚な生活や、

愛だ、愛だと云つて、其の實、グレ氣味の、

不徹底な生活は、送られない様になる。血の、

涙の生活でなければ、嘘だと思ふ様になる、

従つて、部の生活が、呑氣な、面白半分の、

所謂趣味的のものであると思ふと、大間違で

ある。又、華やかな生活だ等と思ふと誤りで

ある。部の生活は、俗界を超越した、飽く迄

眞剣な生活でなくてはならないのである。當

時の私等は一人残らず、この域に達してゐた

のだった。

◎五月中のこと。

中旬、福井武徳殿の道場開きに臨場された

序に、來澤せられた、小關教士、及び、其の

門の五段三人に練習を願つたり、日々の練習

後に行ふ試合、さては、月次會其他對外試

合等により、其の都度、私等一同の自信と、

緊張の度を増された。敵の太刀の振下りる

を見てか、さもなげ、敵に隙を見つけてか、

夜半、自ら發する掛聲に眼醒めて、ひびり鐵

腕を撫する時には、實に、感慨無量なるもの

があつた。

十九日、第一回月次會を開き、市内各中等

學校、高工の精銳及び、本部員若干名、都合

二十六名の紅軍と、十五名の本部員よりなる

白軍と、試合をなし、白軍大に活動して、堀

で喰止め、不戦八名を残して、悠々占勝す。

當日の偉勳者、春木は八人を、近藤は六人を

屠つたが、共に白軍であつた。

◎六月中のこと。

先輩諸兄御自身だけの應援では、猶飽き足

らず、上旬、高師の本間、中西兩氏を、コー

チャーとして招聘して下さつた。勿論、先輩

のみの御好意に依つてである。私等は、それ

を無意義ならしめない様に努力した。其の結

果は、期間こそ永くなかつたが、可成り大き

いまのがあつた。

二日、第二回月次會を催す。市内各中等學

校の精銳と、當時、來援中の、渡邊・武市兩

先輩との混合軍十五名と、十三名の本校軍と、

紅白勝負をなした。本校軍の土川、混合軍の

大將と決勝して勝ち、結局、不戦一名を残し

て占勝す。當日の、屠り倒した數のレコード

は、混合軍では、三人の、二中林(侃氏、帝

大渡邊氏、本校軍では五人の本多であつた。

コーチャの来られた日に、コーチャーと、中本・藤井・古賀各師範の一軍と、十四名の、私等選手軍と、紅白試合を行ふ。結果は、選手軍の惜敗だったが、本間氏の五人を屠られたのや、古賀師範が、七人を撫で斬られたのは論外として、選手軍の本多が、二師範を倒したのは、如何にも殊勳であつた。

十七日、大部分の校友は、既に、試験準備に取か、つて居られたに違ひない。私等は、古賀師範に引率されて、富山縣へ遠征に出掛けた。この擧に賛せられた、市内の七師範も、同道して下さつた。

道場は、神通中學校の、新しいのであつたが、始め、富山縣下各中等學校、聯隊、警察等の、一粒選りの聯合軍十二名と、本校軍の十一名とが、紅白試合を試みた。時間に餘裕がなかつたので、引分も三組あつたが、結局、本校軍の三好で喰止められ、不戦三名を残して占勝す。試合後、この地の、有段者會員一同と、猛烈な稽古をして、薄暮引上げた。

十九日、校友諸兄が、私等の爲に、催ふし下さつた、選手激勵學生大會の後、近藤・大谷

及び、當時來援中の藤好先輩、古賀師範の紅軍と、十一名の選手軍の白軍とが、試合をなした。紅軍は、總べて克く勝つたが、白軍の大將土川の奮闘の爲に、惜しくも勝を白軍に譲る。この時には、既に、自信が出来て居つた。

二十七日、中等學校の選手を招き、本校の三好・大谷、その副・大將となつて、二十二名を統ぶ。十二名の、我軍中、上田、十六名を撫で斬つて、大に氣焔をあげたが、對手の、參將に敗れ、彼の副將三好出づるや、五名を屠つて、吾が土川に迫る。畢竟、吾が軍は、土川でさまり、大將今井を残して勝つ。

三十日、第七聯隊志願兵を迎へて、紅白勝負を行ふ。兩軍九名宛。本校軍先鋒堀善戦して六名を斬り、本多、敵の大將柿下氏を破つて、不戦五名を残して勝つ。

◎七月になつてから。一日から、試験の終はつた前日迄、練習を休んだ。目眩に迫つた南下戦を思ふさま、私等は、どうして、試験の成績に拘泥して居れよう。試験中、寧ろ貯へた英氣を以て、試験の終つた十日に、最後の猛練習を始めた。

十一日に、蛤坂新道の上越學友塾を合宿所と定めた。この時には、一同自發的に、好きな煙草をも全廢してゐた。エネルギーの濫りな消耗を恐れて、放歌一つせず、無聊を慰むる遊戯も、自然、彈棊の如き紅白勝負まなつてゐた。

十六日午前九時二十分、愈々南下を決定す。久しく續いた大雨も、この日は全く晴れ渡つた。朝合宿所で、古賀師範・安田・藤好先輩等臨席の上、十四名の私等選手は、水盃を交はした。

古賀師範の言はれた如く、一年の極樂生活を送る爲に、十日間の地獄生活に突進すべく、一同の眼は血走つてゐた。重大なる責任と、義務とを自覺すれば、苦しみは、既に、私等の願ひるさころではなかつた。

途中、尾山神社に、南下報告の爲、參拜した。神は絶對で、祈禱の有無に關らず、今日迄の努力と、その結果の實力との大きい者に與するものである以上、私等は、優勝を祈らなかつた。唯、絶對なる判断をお祈りするだけであつた。

昨年、贏ち得たる、光榮と權威との象徴を押し立て、停車場に到着した。そこには、御熱誠なる數多の諸先生・市内各師範三十五聯隊將校團代表及び校友諸兄が居られた、私等一行を御見送り下さる爲である。

弓術部選手も同列車であつたが、私等は、上原部長と同室に集り乗る。是非勝たせたいとの、諸彦の御厚情が「首に血を盛る……」のリズムを帯びた時、荊軻の覺悟した私等の靈と結合し、遂に、清い涙をなつたのだつた。

鐵車は進んで大津に達すれば、松本・武市兩輩の出迎あり、五時半、京都に達す。プラツトホームには、多數の諸先輩集られて、一同の元氣を、先づ喜ばる。

翌十七日は、午前一時間だけ、大學の道場で練習し、十八日には、附近の小學校を借り、先輩軍と最後の練習試合を行つた。

年間、暗黒の洞窟に苦しみ惱んだ、必死の一隊が睨んだ。精かぎり、根かぎり、光へ光へと猛進した二百有餘名の壯士が、多年の怨を隠して拍手した。お！其の時に於ける、私等の感じ！

その際、此の度の試合には、從來の正副審判の他に、更に陪審を設くる旨が發表せられた。私等は等しく喜んだ。過去に於て、私等の先人の、審判の不充分の爲に、勝つべくして勝ち得なかつたことが幾度あつたことだらう、それを知る私等は、心からこの試みを感謝した。

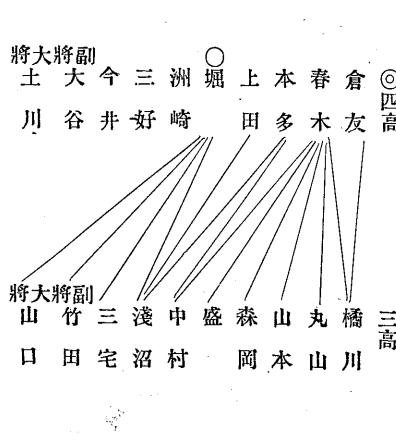
閉會前、各校代表者立會のよきに、試合組合せの抽籤が行はれた。私等は、豫選第二日に、三高と、第三日に、五高と、試合ふことなつた。

十九日には、武專の道場に出掛けて、練習す。その練習前に、歴史の教ふる、恰好の敵手六高剣道部が、大阪醫大予の爲に、第一回戦に一蹴し去られたことが報せられた。私等は、思はぬ強敵の出現を知つて、只緊張した。

◎豫選第二日(二十二日) 三高對四高 この大會が始つてから、數回會戦し、曾つ

ては、我に敗殘の憂目を味はしめたこともあり、昨年は、苦戦に苦戦をして漸く破り得た三高、而して、今年數多の精銳を迎え、四高を唯一の假想敵として研究してゐる三高との試合日である。

△審判は正副審(交替)陪審の順序に記す。審判 越智・井上(藤津崎三先生) 試合時間(自前九時四十五分至午前十一時零分)

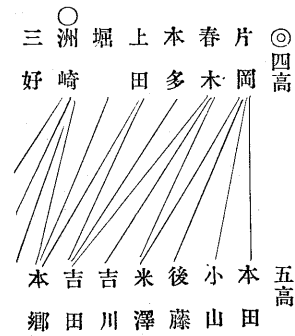


抽籤の結果、本校と試合ふことが發表さるるや、私等を顧みて、ドッッ拍手した三高を、かく綺麗に片付けて仕舞つた。吾先鋒倉友、克く敵の橋川を惱ました惜敗し、續く春木は、未だ前髪立ちの花姿を以

て、善戦五名を屠つたのは、堀の、淺沼を斬つて大勢を決せしめ、一氣に大将迄踏みこむつたのと共に、本日の偉勳であつた。

選手激勵の爲、御上落せられた校長も、喜んで歸る。

審判 櫻井・丹羽・福留三先生
試合時間(自午後二時 至午後四時七分)



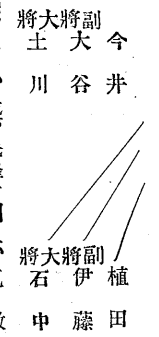
老巧なる、我が先鋒片岡は、克く敵を壓して危地に陥ち入りしめ、洲崎、平常の凄さを遺憾なくあらはし、遂に大将を倒して血にまみれしめたのは、正に功一級と言ふべきである。

三日間の豫選に依り、二勝者戦に加はるを得たのは、二十校の中、山口高商・大阪醫大・七高・山口高及び四高の、五校となつた。抽籤の結果、二十二日午前中、私等は、山口高商と、午後、三勝者の山口高と、戦ふこととなつた。

◎二勝者戦(二十二日) 山口高商對四高

山口高商は、先に、九州大學主催劍道大會に於て、七高と、最優勝戦をなし、大將同志接戦して、惜敗したチームを有し、今日迄の豫選にも、悠々占勝して來たのである。

審判 市毛・内藤・福留三先生
試合時間(自午前十時半 至午後零時十五分)



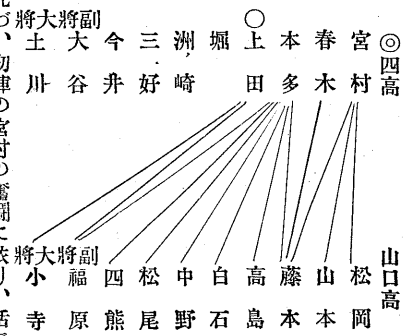
◎四高 山口高商
片岡 安田
春木 石井
本多 田島
上田 金澤
堀 高林
洲崎 岡村
三好 杉山
今川 藪田
副大谷 副脇岡
大谷 大脇岡
大川 大脇岡

◎三勝者戦(同上) 山口高對四高

新進の勢を以て、三勝者戦に入つて來た、山口高との戦は、午後五時頃から始めらるることとなり、私等は、學生集會場で、晝食を喫し、高鳴をかき乍ら、その時を待つてゐた。

審判 中島・内藤・小柳三先生
試合時間(自午後五時半 至午後六時十五分)

先づ、初陣の宮村の奮闘に依り、活氣を呈し、血を見て狂ふ本多は、大將軍何處ぞ、雑兵原に目もくれず、敵のためと思へる中野を屠つて、副將に迫り、合戦數合、大に奮闘せしが、朝來の決心に疲れたる若人は、遂に氣のみ焦つて、手足伴はなくなり、六人を撫斬つて、上田に委す。上田、飛鳥の如く、身を躍らせて、よく攻撃し、再び大将斬りの功名を立つ。



因みに、この試合時間四十五分は、本年は勿論、南下戦未曾有の短時間であつた。

この日は、前日、前々日の如く、合宿所附近の小學校で練習するには、時間が足らな

つた爲、本年優勝戦の爲め、最後の練習を、大學道場で行つた。この練習の凄かつたことは、平凡な形容では、到底言ひ表すこと出来なかつた。練習として、これ程、緊張したものゝを、果して、何人が、幾度経験し得たであらうか。練習と言ふよりも、寧ろ、眞劍勝負である。こんなのが、もう十分も續けられたら、如何に鍛錬し、緊張しきつてゐた私等でも、その場に打倒れたに違ひない。

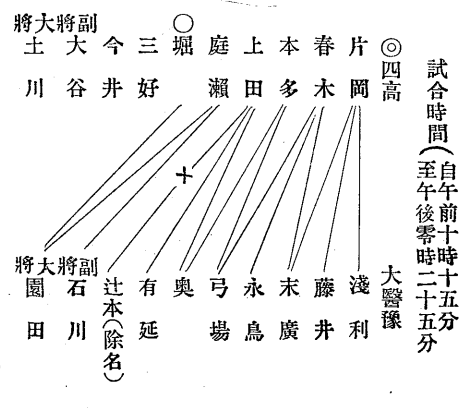
◎最優勝戦(二十三日) 大阪醫大對四高
大阪醫大豫科と、愈々地上の覇權を争ふ日となつた。彼の強きは、第一回豫選に於て、六高劍道部をして、一敗地に塗れしめた。け

血河屍山を現じ呉れんぞ進む、我若武者の背後には、全選手に倍する先輩が續かれた。

この日あらん爲に鍛へ上げた、私等の腕の唸り、心琴の奏でる最後の神曲との、眞の聴者としては、この先輩ある許りである、ルーテルの、破門をものこしなかつた、あの犠牲の焔も、私等の、粉骨碎身一命を投出してゐる大神の光に比しては、未だ暗きまを感ぜられたことだらう。

審判 小柳・中島・内藤三先生

先鋒の勝敗、これ全軍の士氣に關す、片岡・淺利は、互に自重し、秘術の限りをつくして戦ふこと三十分、軍配は遂に吾が片岡にある。春木、難劍以て敵に肉薄し、彼の闘將永島を斬るや、大勢略決す。續く本多も、中堅弓場を倒して、奥と決勝となつたが、死物狂の彼は、遂に我が籠手を揺落す。奥また、あやしき籠手を以て、我が上田を憚したが、我が爲に、面上深く斬込まれ、あなやと見る間に倒れる。勢に乗じて、上田は、有延をも屠り、辻本と立向ふ。彼我鏖競合ひさなるや、彼は、巻込逆業を以て、上田の左脇關節を外



したれば、我が上田は、遂に戦闘不能なる。敵愾心に燃ゆる上田は、已むなく病院に運ばれ、直に應急手当を受くることとなつた。彼辻本のなせることは、斯道の全く許さざるころ、本大會試合規定に従ひ、從來稀有の處分法適用され、遂に彼は、當試合を除名されることとなつた。満場の觀覽者の聲は、憤慨より直に快哉にかはり、我が補缺庭瀨立ちて、彼の副將石川と睨み合ふに至るも猶やまず、其中に、庭瀨は、石川を難なく屠つて、吾が陣容の飽く迄強固なるを證す。庭瀨を斬つて最早や傲慢不遜なる彼園田は、他校にさせる功績を夢見たらんも、復讐の機を得て喜ぶ、我が堀に向つては、先づ腦天より打おろされた。傷手に屈しない古武者も、漸くにして我が籠手に打込みしが、それは唯に膚にさまり、却つて、我が堀の悍性の怒を買ひ、一太刀に片手首を失ふ。

× × × × × × × ×

遂に吾が軍は勝つたのだ。一度として、後陣を煩はさず、順を待つ裡にも、常に頭を上げて、心強く感じ乍ら勝つたのだ。南下戦始つて以來の好成績で優勝したのだ。

優勝旗は授つた。銀賞牌は授つた。道場を拍手の裡に退いた。本望を果したのだと云ふ

こころを、漸く悟つた。戦友の肩を濡らす涙は、止め度なく流れる。大朝、京都日々等の、レンズの前立に立てることも意識しないで、泣き續けた。「男じや、泣くな。」と、なだめる先輩の瞳も、「勝つたのだ。泣かなくとも可い。」と、すかされる上原部長や古賀師範の眼も、何等私等と變つてゐなかつた。同じく、感激の涙が溢れてゐた。

「洛陽寒く……」と、吉田原頭を戻る途中、

幾度涙の爲に歌ひ得なかつたことだらう。

下宿で、先輩から貰つた金口煙草の味はひ、大つ平で呑み乾した、サイダーや生水の味はひ、これは私等達のみに許された、眞の旨さであるに違ひない。

× × × × × × × ×

私等は勝つたのだ。未曾有の成績で、榮ある天下の覇權を、四たび、握り得たのだ、この優勝旗を得んが爲に、どれだけの犠牲が拂はれたことだらう。努力の前には、何ものもないことを信じて、勝利に能なき虚勢を張るよりも、内面の、充分なる實力を養ふ爲には、成程、沈黙の苦闘を續ければならなかつた。併し、努力の前には、何物もなかつたのだ。神は、矢張り絶對であつたのだ。

夜遅く迄、練習を續ける私等選手の、面の

奥に輝く涙を、腕から進る血潮さ、——お、その血を涙だが、勝つべくして恵まれない先人の、それ等と混じて、あの優勝旗をなつたのではあるまいか。誰か言つた「努力は、成功の重要部分を占む。」と。しかも、成功が、努力に依つて得られた時、始めて、絶對の價值があることを、私等は、痛切に感ずるのである。

× × × × × × × ×

優勝の翌朝、合宿所の本部で、莊嚴な宣誓式が行はれた。勝利は敗殘の第一歩であることは事實だ。併し、五度優勝、三度連勝の爲には、如何なる努力をも辭しない覺悟と自信さは、この腹を腕にある。私等の涙は、その決心の大きければ大きい程、止め度なく流れる。私等は、先人の尊い歴史を、校友の熱誠を思ふと、その努力を、やらざるを得ないのだ、男として。實に、この已むを得ない時行爲からは、寂しいけれども力強い努力が生れることを知つてゐる。

× × × × × × × ×

洛陽の地を震駭させん許りの優勝歌に送られて、二十四日夜、歸校の途につく、上原部長及び、大谷他数名の選手に擁されて、優勝旗は、翌早朝歸澤。一同は、尾山神社に優勝

報告の参拜を終へて、當日、諸先生と共に、御出迎下さつた校長に、優勝旗を納めた。

× × × × × × × ×

諸兄よ。紫紺の優勝旗に附せられた四つ目の星を見られよ。それは、只絢爛を輝かすだけ。その奥には、先輩と校友の熱誠に感じた、私等一同の、純な、清い涙の流れるを見るであらう。また、それを附する迄に、諸兄の惜氣なく注がれた眞心に對する、心からの感謝の涙が、にぢみ出てるであらう。

(一九二三年十一月一八鐵潮生)

野球部報告

對八高戦

陽春到來の聲に選手の血潮は高鳴つた。若草萌ゆるあの仙石原で、心ゆく迄楽しい練習をする時が来たのかと思ふさき、選手の内は無精に嬉しかつた。學年試験が終るに部員は揃つて合宿所に籠り、こゝに今年度の練習は開始された。新學期に入つて、吉田、島、永濱の新選手を得て、吾部の強味は數倍された様に思はれた。

春色は日増に濃くなつて、物皆春の喜びに

輝き初むる頃となつた。灰色の空の下に數月の間冬籠して居た人々は春を尋れて、野に山に行樂の杖を曳いて、春の氣に陶醉する時、選手は緊張し切つた心持で、無亂の練習に寸刻をも惜んだ、練習は日一日と猛烈の度を加へて行く。時は容赦なく過ぎ去つて行つて、仙石原には初夏の微風が薫る頃となつた。戦の日は益々接近して來て、グラウンドの氣分は一層殺氣立つて來た。

その時京大の先輩山内氏が遙々この地に來られたので、選手の勇氣は百倍した。練習が猛烈になればなる程、選手の技量はメキメキ上達した。加ふるに加藤正投手の肩は益々冴へて來て、自信は十分に付いた。然しその喜びも束の間であつた。何と云ふ運命の神の皮肉であらう。試合前一ヶ月頃から、柱と頼んだ正投手の肩は狂ひ始めた。部員の心は暗い影に閉された。然し未だ一縷の望を托して、十分養生せしめたが、一度狂ひを來した彼の肩は元の如くに冴へなかつた。いら／＼した氣分の内に六月も半を過ぎて、戦の日は既に數旬の後に迫つた。もう最後の練習だ！部員の念頭には只「戦」より他は何物もなかつた。かくて試験の一週間も過ぎて、愈々戦の日は來た。

忘れもしない。七月十日の夜、金澤驛頭に渦巻く應援の聲に送られて、汽車が静々金澤の地を離れて行く時、部員の心の中には「死んでも勝つて歸るぞ」と固く誓はれた。その夜緊張し切つた選手は一睡もする事が出来なかつた。午前八時、汽車は敵地に着くと同時に「見よこの英姿」と歌はる、敵の應援歌を聞き、吾等の敵愾心はいやが上に爆り立てられた。

敵地の天候は悪くて、容易に晴れさうにも見へなかつたが、この際一分一秒も貴い時間であるので、天候等は兎や角云つて居られぬ、十一日は午後より八高グラウンドに先づ最初の練習を行ひ、十二日は小雨の時間を利用して軽く練習した。十三日は終日雨の内に練習も出來ずに終つた。

愈々戦の十四日の日は來たが、朝來天候悪しく、加ふるに午後からは雨となり、遂に延期のやむなきに至つた。

その翌日も雨天のため試合不可能となり、選手一同たゞいら／＼した氣分で見守りながら、不安な一日を終つた。然し夕方頃より西方の空が晴れ渡つたので或は明日は快晴だらうと幾らか晴々とした心持で床に入つた。その期待も見事欺かれて十五日の朝は相變らず泣

き出しさうな空模様だつた。然し應援團の方
はこれ以上延期する時は、解散せねばならぬ
と云ふ事情にあるので、遂に意を決して午後
一時より戦を開く事になつた。

正十二時選手は先輩に護られ、更に熱烈な
る應援團に鼓舞されて戦場に向つた。敵は一
壘側に味方は三壘側に陣を張り、兩軍應援戦
は開かれ戦端未だ開かざるに、殺氣既にグラ
ウンドを壓した。

正一時東大選手(球審)山本、近藤(壘審)
三氏審判の下に戦の幕は切り下された。

經過報告

第一回(表) 八高先攻

安宅四球に出で、青木投手頭上を抜く安打
に安宅二壘に進み、難波捕邪飛後山田四球さ
なりて満塁、投手暴投に敵一点を入る、篠田
投捕に青木ホームに入らんとして刺さる。

(八高一點)

第一回(裏)

大洞四球後寺西の横打に二壘に送らる、川
澄三振、吉野捕邪飛に死す。(四高零)

第二回(表)

飯島四球、戸塚三壘捕に生き、萩原投捕に
死し、富永四球を得て満塁、安宅三振、青
木中飛に死して終る。(八高零)

第二回(裏)

四高この回振はず無爲に終る。(四高零)

第三回(表)

八高無爲。(八高零)

第三回(裏)

小島二飛後岡本捕邪飛に死し、大洞三遊間
安打の後連盗し、捕失に一点を得、寺西投捕
に死す。(四高一點)

第四回(表)

戸塚三振、萩原中前安打、富永中右間二壘
打に出で安宅一壘越安打に萩原富永生還、青
木二壘、難波四球後山田更に四球となり、篠
田投捕に死せしも、投手一壘に暴投せしため
安宅生還し、その隙に乗じて難波又生還す、
飯島二壘に死す。(八高四點)

第四回(裏)

川澄四球に出で、吉野三壘に死し、加藤一
壘に死せしも、川澄生還す、石上四球後投手
の暴投に盗塁して三壘に至る、吉田三振。

(四高一點)

第五回(表)

(永濱投手、寺西捕、小島一壘、
加藤右)

戸塚中前安打後萩原中飛に死、富永一壘、
戸塚二壘に封殺され、安宅二壘に死す。(八
高零)

第五回(裏) (山田投、萩原一)

四高無爲。(四高零)

第六回(表)

八高無爲。(八高零)

第六回(裏)

寺西左飛、川澄四球後吉野野手選擇に一壘
を得、加藤三振不死となり、石上の横打に川
澄ホームに入らんとして刺さる、吉田野選に
一壘を得し間に吉野生還、小島三壘に出でし
も敵失に生きその隙に加藤生還し、永濱の死
球に石上生還し兩軍の得点同点となる、大洞
中飛に出でても敵の美技に死す。(四高三點)

第七回(表)

飯島一壘戸塚二壘に兩者死し、萩原遊捕に
生き、富永の中前安打に生還、安宅捕妨のた
め一壘を得て富永生還、青木二直球に死す。

(八高二點)

第七回(裏)

寺西四球後川澄投捕に生きしも、寺西二壘
に封殺さる、吉野遊飛に死せしも加藤の中前
安打に川澄生還し、加藤二壘に刺殺さる。

(四高一點)

第八回(表)

難波安打し山田の三壘打に生還、篠田の三
壘に山田生還、飯島遊飛に死し、戸塚三壘打

に篠田生還し安宅四球に出でて満塁となり、
青木の中前三壘打に萩原富永生還す、難波二
壘後青木三壘を盗まんとして死す。(八高七
點)

第八回(裏)

四高無爲。(四高零)

第九回(表)

(大洞投、小島捕、寺西一、加
藤左、永濱右)

山田四球後篠田二壘に生き、飯島三壘に生
きて満塁となり、戸塚四球に山田生還、萩原
左飛に死せしも篠田その隙に生還、富永四球
(永濱投となる)安宅左中間安打に飯島生還し
て満塁、青木の投捕に戸塚ホームに封殺、難
波二壘失に富永、安宅生還、山田遊飛安打に
再び満塁となりしが、後援無くして終る。

(八高五點)

第九回(裏)

ヒンチ寺島安打後大洞の中右間安打に二壘
に進む、寺西投捕、川澄の右中間安打に寺島
大洞生還、吉野三振、加藤四球石上四球を取
りて満塁となりしも、後援無くして終る。

(四高二點)

かくて十九對八のスコアにて我軍遂に敗北
せり。

機打	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
盗塁	2	0	4	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0		
得点	2	0	2	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1		
安打	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
打數	4	3	3	5	4	3	5	4	1	1	1	1	1	1		
刺殺	0	4	3	1	2	3	2	12	0	0	0	0	0	0		
捕殺	1	0	2	4	1	1	6	2	0	0	1	0	0	0		
失策	0	4	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0		
大寺	(7.1.9)															
洞西	(3.2.3)															
川澄	(5)															
吉野	(1.9.7)															
藤上	(8)															
加藤	(4)															
石上	(2.3.2)															
吉島	(6)															
小島	(1.9.1)															
岡本	(P.H)															
永島	(5)															
萩原	(3.2)															
寺島	(1)															
萩原	(2.3)															
永島	(5)															
合計	5	13	27	46	14	19	5	1	13	17	27	34	5	8	9	1

機打	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
盗塁	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
得点	4	0	2	2	2	1	1	3	0	0	2	4	5	1		
安打	2	2	1	3	1	0	0	1	1	3	4	2	2	2		
打數	4	7	6	4	7	5	5	5	1	3	3	2	2	2		
刺殺	1	5	2	6	1	1	2	8	1	1	1	1	1	1		
捕殺	1	1	0	3	0	0	2	0	2	0	2	0	0	0		
失策	0	0	0	2	0	0	1	0	2	0	2	0	0	0		
安宅	(8)															
青木	(4)															
波田	(7)															
山田	(3.2)															
萩原	(9)															
飯島	(1)															
塚原	(6)															
永島	(2.3)															
萩原	(5)															
合計	5	13	27	46	14	19	5	1	5	13	27	34	5	8	9	1

試合の幕は閉された。拭ふことの出来ぬ一
大汚點を吾等は四高野球史上に印した。何と
云つてこの罪を八百の校友に御詫したらよい
だらう。今となつては吾等が最後迄ベストを

盡したことを認めて下さる校友諸君の寛大な
る心にすがるより外はない。

友よ！來年こそは吾等の力を信じて下さ
い、吾等の身体を巡るこの赤血が、最後の一
滴となるまで奮闘しても勝つて見せます。

最後に應援團諸兄に對しては今こゝに感謝
を現はす言葉すらありません。

校内對級試合

今年には金澤には珍らしく好天氣が續き、曲
りなりにも最優勝戦を目出度く終る事が出来
た事は、吾々の非常に喜ばしく思ふ所です、
左に取組及び戦跡を示します。

(第一回戦)

- 理三乙—理三丙
- 理三乙—理二乙
- 理二甲—理二乙
- 理二甲—理二丙
- 理一丁—理一乙
- 理一乙—理一甲
- 理二丙—理三丙
- 理三乙—理三甲
- 理三丁—理二丁
- 理一丙—理一丙
- 理一甲—不戦一勝者

(二回戦)

- 理二甲—理三丁
- 理三乙—理二甲
- 理三甲—理一乙
- 理三乙—理二丙
- 理一丁—理一丙
- 理二甲—不戦二勝者

(第三回戦)

- 理三甲―理三乙
- 文三甲―理二甲
- 文二甲―理三甲
- 文三乙―不戦四勝者
- 文三乙―文二甲

(最優勝戦)

大正十二年クラススマッチ最優勝の桂冠は、遂に文三乙の得る所となつた。今年は過半数以上のチームが相當な良チームであつたことは吾々の意外とする所で、文三乙、文二甲、理三乙、理二甲、文二乙等は特に傑出するものであつた。(先崎記)

陸上競技部部報

思ひ起す一年の昔、鬱勃たる野心に加越の山河を巻きて馬驅遠征東へ數百里、信が誇りの松本の堅城を抜かんとして遂に及ばず接戦十有六合の結果、馬斃れ矢盡き刀も折れて今は如何ともする由なく、アルプの山麓靜かに黃昏る、原頭、我々敗殘の士三十は唯血と涙に雪辱を誓つたのであつた。

一年の春秋は淋しくも流れた、或る日は卯

辰の山に紅葉の散るを聞いた、或る日は兼六の園に櫻の落つるを知つた。而し乍らその紅葉その櫻は何で我々の眼に入らうか。雨の朝、風の夕の練習にも又半夜殘燈の影幽かなる頃、巨鐘の如くに耳に響くは雪辱の叫び、此の恨み忘る、勿れ。であつた。

た事である。高等學校の對抗ゲームが世人の視聽を集むる所以は其の技ではない、其の意氣に在りては巷間傳ふ所であるが現代の微細の点にまで科學的知識を要する陸上競技は、單に意氣のみを以てしては到底其の効を擧げる事は覺えないのである。

今や尾山城下金城鐵壁を擁してアルプアイズの流と擬ふ犀川の邊りオソムピアの野が仙石原頭我々は鶴翼の陣を敷き勝に乗せる松本勢を遊撃せんとするのであつた。

風未だ寒き北陸の三月明けなんとする新學年の練習始めに我々は寮に合宿した。雪辱を誓ひし部員等の練習は殘人の雪を蹴つて或はトラック或はフィールドと意氣と血に燃ゆる若人の活躍は見るも壯絶の極みを盡したのであつた。

今年も此の跌を踏む様な事があつてはと憂へたのは主將安倍のみではない。先輩、コーチヤーの訪れる事に此の事のみを突々も注意されたのである。

而し乍ら冷やかに昨年の敗戦を觀察する時、我々は唯一つの缺點を認めざるを得ないのである。その唯一つの缺點こそ我が遠征軍をして四十八点對四十二点と云ふ大接戦の結果、志成らずアルプ山下の夕まぐれ、健兒相抱いて聲涙共に下ると云ふ悲壯なドラマに終らしたためである。

其の缺點とはオーバーワークである、科學的練習法を缺いて單に意氣のみを以て練習した。而し乍ら此の練習は意外にも誤解を招いた。或る者は「だれて居る。」と云ひ又或る者は「意氣なし」と罵しつた。此の惡評を聞いた時我々の心中は苦しかった。校友八百の諸君の名譽を懸けて戦ふ我々の胸中に何で意氣が無からうか、何でだれた練習を好んで爲さうか。我々の此の血と涙の練習を、辛い苦しい練習を、而も去年の苦い經驗によつて始めて知り得た此の練習を。

戦の前日即ち二十一日には唯ロングを引いたのみで練習を休んで英氣を養つた。敵は之見よがしに縱横にトラックを馳せ廻つて居る。其の姿は反つて何となく我々に安心を與へたのであつた。

葉櫻は一雨毎に濃く尾山城頭初夏の面影は濼の水に姿を寫す頃に成つて來た。六月と叫んだ時、餘す一月、選手の心は緊張その物であつた。今やフォームは出來、トレーニングは終つた、此の上はレコードを延すのみである、日毎に各人の記録が上り、駄目だと思ふ選手が案外好いタイムで走る様に成つてきた。

此の月に入つてから我々の練習時間は一時間半と嚴定され過勞を絶對的に避ける事にした。又ジャンプの選手は一日三回以上の跳躍を禁じ、トラック、フィールドの選手は水曜土曜の兩日の外はレコードを取る事を禁止した。何故ならば此の頃の練習は試合當日と密接なる關係を有し、一寸の過勞も直に影響するが爲である。競技の練習は試合の一月前程苦心を要す時期はない。練習過勞と不足とは

戦の前日即ち二十一日には唯ロングを引いたのみで練習を休んで英氣を養つた。敵は之見よがしに縱横にトラックを馳せ廻つて居る。其の姿は反つて何となく我々に安心を與へたのであつた。

此の月に入つてから我々の練習時間は一時間半と嚴定され過勞を絶對的に避ける事にした。又ジャンプの選手は一日三回以上の跳躍を禁じ、トラック、フィールドの選手は水曜土曜の兩日の外はレコードを取る事を禁止した。何故ならば此の頃の練習は試合當日と密接なる關係を有し、一寸の過勞も直に影響するが爲である。競技の練習は試合の一月前程苦心を要す時期はない。練習過勞と不足とは

此の月に入つてから我々の練習時間は一時間半と嚴定され過勞を絶對的に避ける事にした。又ジャンプの選手は一日三回以上の跳躍を禁じ、トラック、フィールドの選手は水曜土曜の兩日の外はレコードを取る事を禁止した。何故ならば此の頃の練習は試合當日と密接なる關係を有し、一寸の過勞も直に影響するが爲である。競技の練習は試合の一月前程苦心を要す時期はない。練習過勞と不足とは

此の月に入つてから我々の練習時間は一時間半と嚴定され過勞を絶對的に避ける事にした。又ジャンプの選手は一日三回以上の跳躍を禁じ、トラック、フィールドの選手は水曜土曜の兩日の外はレコードを取る事を禁止した。何故ならば此の頃の練習は試合當日と密接なる關係を有し、一寸の過勞も直に影響するが爲である。競技の練習は試合の一月前程苦心を要す時期はない。練習過勞と不足とは

此の月に入つてから我々の練習時間は一時間半と嚴定され過勞を絶對的に避ける事にした。又ジャンプの選手は一日三回以上の跳躍を禁じ、トラック、フィールドの選手は水曜土曜の兩日の外はレコードを取る事を禁止した。何故ならば此の頃の練習は試合當日と密接なる關係を有し、一寸の過勞も直に影響するが爲である。競技の練習は試合の一月前程苦心を要す時期はない。練習過勞と不足とは

此の月に入つてから我々の練習時間は一時間半と嚴定され過勞を絶對的に避ける事にした。又ジャンプの選手は一日三回以上の跳躍を禁じ、トラック、フィールドの選手は水曜土曜の兩日の外はレコードを取る事を禁止した。何故ならば此の頃の練習は試合當日と密接なる關係を有し、一寸の過勞も直に影響するが爲である。競技の練習は試合の一月前程苦心を要す時期はない。練習過勞と不足とは

此の月に入つてから我々の練習時間は一時間半と嚴定され過勞を絶對的に避ける事にした。又ジャンプの選手は一日三回以上の跳躍を禁じ、トラック、フィールドの選手は水曜土曜の兩日の外はレコードを取る事を禁止した。何故ならば此の頃の練習は試合當日と密接なる關係を有し、一寸の過勞も直に影響するが爲である。競技の練習は試合の一月前程苦心を要す時期はない。練習過勞と不足とは

此の月に入つてから我々の練習時間は一時間半と嚴定され過勞を絶對的に避ける事にした。又ジャンプの選手は一日三回以上の跳躍を禁じ、トラック、フィールドの選手は水曜土曜の兩日の外はレコードを取る事を禁止した。何故ならば此の頃の練習は試合當日と密接なる關係を有し、一寸の過勞も直に影響するが爲である。競技の練習は試合の一月前程苦心を要す時期はない。練習過勞と不足とは

此の月に入つてから我々の練習時間は一時間半と嚴定され過勞を絶對的に避ける事にした。又ジャンプの選手は一日三回以上の跳躍を禁じ、トラック、フィールドの選手は水曜土曜の兩日の外はレコードを取る事を禁止した。何故ならば此の頃の練習は試合當日と密接なる關係を有し、一寸の過勞も直に影響するが爲である。競技の練習は試合の一月前程苦心を要す時期はない。練習過勞と不足とは

此の月に入つてから我々の練習時間は一時間半と嚴定され過勞を絶對的に避ける事にした。又ジャンプの選手は一日三回以上の跳躍を禁じ、トラック、フィールドの選手は水曜土曜の兩日の外はレコードを取る事を禁止した。何故ならば此の頃の練習は試合當日と密接なる關係を有し、一寸の過勞も直に影響するが爲である。競技の練習は試合の一月前程苦心を要す時期はない。練習過勞と不足とは

試合経過

午前九時入場式與行、武藤校長の挨拶に次

ぎ大久保審判長の競技開始宣告あり。兩校選手の挨拶後直ちに競技に入る。

■百米 四高選手(神戸、藤澤、吉野)

- 一等 飯澤(松) 十二秒
- 二等 藤澤(四) 同着
- 三等 神戸(四) 殆んど同着

此の種目は敵方書入れのゲームにして少なくとも五点を豫期せしならん。四高流のスタートダッシュ見事に四高三者先頭を切り五十

米附近にては神戸藤澤他を歴し吉野飯澤芳賀殆んど並びて競走す。七十米より藤澤のラスト

同時に飯澤はスローリッシュにて切ると同時に飯澤はスローリッシュにて跳び込み一時議論起りしが結局飯澤一着と決定、又三着は神戸吉野芳賀の三騎同時に先頭より五十

戦は敵軍の期待を裏切るも同時に我が軍に多大の自信を與へたり。

■砲丸投射 (服部、吉野、原田)

- 得点 兩軍共三点

服部は練習の時より五十種程延びて十二米を確實に越ゆるに反し平素十二米五十に達する云ふ敵將飯澤案外振はず。服部の記録は全國高等學校の記録を破り又昨年までの日本記録を越す物なり。

■八百米 (安倍、松原、北川)

- 一等 服部(四) 十二米五十一
- 二等 飯澤(松) 十一米九十二
- 三等 吉野(四) 十米九十四

得点 四高 四點 松高 二點 計 七點 五點

■四百米 (安倍、松原、北川)

四高方の策戦としては戦慣れたる安倍をベ

勝せんも手筈を定めたるに、松原數日來脚氣再發して往年の面影なく遂に我が軍惨敗しぬ。

■千五百米 (高橋謙、北川、本林)

- 一等 千葉(松) 二分十四秒
- 二等 平川(松)
- 三等 安倍(四)

得点 四高 一點 松高 五點 計 八點 一〇點

■走幅跳 (布施、藤澤、松長)

松高得意の科目と云ふ評判に反し布施劈頭

シーステップに六米十七を越し藤澤又スプリントを利して六米十に至る。敵主將飯田元氣なく松長の差一握半にて激戦しつゝベスト

■圓盤抛 (松長、和爾、吉野)

- 一等 布施(四) 六米十八・五
- 二等 藤澤(四) 六米一〇
- 三等 飯田(松) 五米七二・五

得点 四高 五點 松高 一點 計 十三點 十一點

■圓盤抛 (松長、和爾、吉野)

戦前の評に據れば敵が得意のエンペツにして我が和爾の幾何程までに食に込むか問題なりしなり。而るに敵は飯澤を除いて元氣なく、即ちベストフオアに入る頃は飯澤和爾間に大接戦が演ぜられ僅少なる差にて吉野之に次ぐ。此の間、圓盤せるフオームにて和爾は飯澤を追ひ吉野又馬力にて詰めしが遂に及ばず。

■高障碍 (布施、近藤、原田)

- 一等 飯澤 二十六米六五
- 二等 和爾 二十六米三八
- 三等 吉野 二十五米九三

得点 四高 三點 松本 三點 計 十六點 十四點

布施の優勝は既定の事實にして唯日本記録を破るか問題なり。俄然スタートを切るや直ちに二米程リードし飯田、近藤、渡邊之に

近藤、渡邊間には猛烈なる接戦起り原田、飯田之に次ぐ。七十米にて近藤、渡邊共に焦つて各々ハードル三個をノックダウし飯田二位

に立ち原田一米遅れて争ふ。此の頃布施は悠悠テープを切りしが飯田、原田は猛闘を續け第八ハードルにて原田スパイクの取れしにも

■千六百米リレー (藤澤、北川、安倍、神戸)

- 得点 四高 五點 松高 一點
- 計 二十一點 十五點

記録三分五十五秒

■二百米 (藤澤、神戸、吉野)

- 一等 藤澤 二十四秒二
- 二等 飯澤 二米遅る
- 三等 神戸 五十種遅る

午前的小計 二十四點 十五點

此の回到松原退き代りて本林出づ。四高側五周に於て朝來の激戦に疲れたる北川先づ倒れ小島は高橋に約半周遅るゝに至る。第六周より高橋、千葉は僅二米の差に成りて兩者秘術を盡して互に牽制し合ひ二十米遅れて平

■低障碍 (布施、神戸、近藤)

- 一等 飯澤 二十八秒八
- 二等 杉浦
- 三等 布施

得点 四高 一點 松高 五點 計 三十六點 二十七點

■走高跳 (石塚、幅野)

此の技は松高最も得意の物にして昨年四高は零敗したるなり、而して今年も最も有望視されし布施今の痛みに退きて出場せず。新進幅野フオーム善く元氣ありしが敵は戦場往來の古強者。城所一人を討ち破りて共に倒れ、石塚孤軍奮闘辛くも三等を奮ふ。

■槍投 (齋藤、服部、松原)

- 得点 四高 二點 松高 四點
- 計 三十點 二十一點

服部、齋藤の巧妙は萬人の認むる所、又松原は新進の勢を驅つて記録見る可き所ありしが此日病に冒され元氣なく遂にベストフオアに落つ。

■四百米 (布施、藤澤、松長)

- 一等 服部 四十一米七十四
- 二等 齋藤 三十八米四十六
- 三等 飯田 三十七米五〇

四高の得点已に四十に至り此の技に全勝せんか總得点九十の半ばを占めて雪辱成る可し

ラストボールに出場せる三士、唯黙々とし
て胸中に浮ぶは叱咤の叫び「雪辱か、死か。」
「必ず全勝します。」布施の誓は先輩の前に
立てられたり、思へば一年の昔。我々は此の
ホップに於て零敗を喫し、松軍一擧六点を占
め總点の過半を握りて凱歌を上げしなり。三
士は立ちぬ。一擧に凱歌を上げて雪辱せんま
皆を決して、でぬ。

布施失つ出で、跳べば、空間彼が身体は翼
の生へし如く見事に十二米四五に至る。續く
松長十一米九〇を越へ飯澤、藤澤共に焦りつ
四者ベストフオアに入る。藤澤彼が身体は鐵
平、已にして四百米の疲勞の回復せし彼は第
五回に跳べば飯澤見事に一蹴せられ、松高選
手顔を上げる者だに無し。かくて藤澤第六回
に十一米九二を越し二等を得。

- 一等 布施 十二米四五・五
- 二等 藤澤 十一米九二
- 三等 松長 十一米九〇
- 得点 四高 六點 松高 〇點
- 計 四十六點 三十五點

■棒高跳 (安倍、原田、洲崎)

勝敗已に決す云へども更に差を大にせん
と勇みて三十善く跳び四高更に勝ち越す。

安倍、太田の接戦は其の美麗なるフオーム

に満場の聲援盛にして、結局、未成品の原田
善く粘り大先輩西村の記録に達して優勝す。
未成の原田、今にして此の如し。或は來年は
大西村を破るに至らんか。

- 一等 原田(四) 二米九十五
- 二等 安倍(四) 二米八十八
- 同 太田(松) 兩者同成績
- 四高 四點五分 松高 一點五分
- 計 五十點五分 三十六點五分

■八百米リレー (神戸、安倍、藤澤、吉野)

第一走者神戸例の如くに見事にスタートし
直にコーナーを奪ひ敵一番芳賀を抜く事約三
米、安倍と敵杉浦は一時兩者接戦せしが結局
同じ差にて藤澤對上島に至る。藤澤朝來の激
闘に些も疲れず輕きスプリントに上島を離す
約八米、大勢すでに定まり、吉野ホースダッ
シュに頑張り飯澤の苦闘も効なく四高見事に
ゴールインす。

- 記録一分四十四秒八
- 得点合計 四高 五十三點五分
- 内トラツク 二十五點
- フキルド 二十八點五
- 松高 三十六點五分
- 内トラツク 二十三點
- フキルド 十三點五

折しも夕陽西に沈んで尾山城下黄昏の影濃
き中に只聞ゆるは「勝てり」の四高應援歌の高
唱のみである。「勝つた、其の一言に我々の疲
れは全く拭かれた、雪辱今は我々は其れを
成した。我々の眼に溢る、は唯感激の涙ばか
りであつたのです。」
謹しんで當日應援下された諸兄に感謝致し
ます。

對石川教員俱樂部戰

秋に成つて中學對手の試合にも厭きた我々
に取つて師範〇、Bとも云ふべき石川教員軍
のチャレンザには喜んで應じた。即ち十月十
四日金石トラツクにて小雨を冒して舉行。
しかし遂に雨は激しく續行不可能であつて
殘餘の四種目、四百米、棒高跳、ハムマー抛、
千六百米リレーを中止に決した、此の時まで
の兩軍得点、四高36、石川27

敵の豫想を裏切つて大勝したが石川軍は相
當強く北陸地方では四高を除く他の専門學校
は恐らく之に對して勝を得る事は出來ぬであ
らう。我々は附近に練習試合に似合の敵を見
出した事を喜ぶ。

× × × × ×

■對校競漕の經過に就いて

北辰會各位校友八百諸兄、今夏の對六高レ
ースの經過を御知らせするは實に感喜に堪え
ず。今日此頃こそ四高漕艇部も漸く認められ
校内のポート熱も日に盛んになつて行き
つ、あるのは誠に嬉しい極みである。然しこ
れも時代の趨勢の然らしめる所もあらうが必
ずやこれには依つて來る所以のものがあるに
違ない。

さる程に星移り人變り明治も大正になつて
數年を経たるに四高運動界に一大改革が起つ
た。それは云ふ迄もなく大正九年東大主催の
全國高等學校競漕に出場すること、なりその
時始めて四高漕艇部が呱呱の聲をあげたこと
であらねばならぬ。これ迄に到る経路につい
ては多數先輩の御努力のあつた事は云ふ迄も
ないこと殊に特筆したいのは田中先生の献
身的御盡力で漕艇部の育ての親と云ふべきも
のである。又東大選手たる先輩が漕艇部の土
臺を築かれしことである。然して北國健兒の
腕を見せんと人は火の側を離れぬあの寒風吹
き荒む真冬に猛練習の後墨堤に覇を争はんこ
東上せられし武運拙く敗れて以來臥薪嘗膽
二星霜。機漸く到らん。然り而して内に

滿つる所必ず外に表はる、は理の當然。何に
つけ自ら四高の中心を以て任する我漕艇部は
こゝに對六高レースを行ふことになつたので
ある。時は大正十一年夏八月六日オックスフ
ォード、ケムブリッヂのレースを思はず可き
東大對京大レースに先立ちて近江瀬田川に行
かれた。その結果は二ヶ年の鍛へし腕も何等
その甲斐なく二艇近くの差にて六高をして名
をなさしめたのであつた。

敗因は種々あらう敗軍の將は兵を談ぜずと
雖も研むべき敗因を忘れることは賢ならず。
我々は六高に名をなさしめてより四高漕艇部
遂に成すなしとの語を聞いて若い血に燃ゆる
我々はどんなにか心を苦しめ血を湧かした事
であつたらう。歴史は未だ淺しと雖も先輩の
爲四高の爲我々は今年は何としても勝たねば
ならない。男の意氣地が立たない朝に夕に
天に地に幾度か誓つたことであろう。生れて幾
日も經ぬ幼子の我漕艇部が今年榮ある勝利を
得ることによつてのみ存在の一路を見出し得
るものなることを知つた時我々は如何して居
つとして居られよう。どうしてぢつとして居
られよう。

あらゆる方面に新生命を開いて勝利を得ん
が爲又漕艇部存立の爲あらゆる努力と奮闘を

期して起つたのは長い間さざされた北國の冬
の窓より逃れ出て仙石原にも春の廻り來た陽
春四月、兼六公園の櫻もほころび出した時で
あつた。

意氣に燃え感激に滿つる新進部員諸兄を迎
へ得て我々は猛練習を開始したのである。そ
れも唯勝んが爲であつた。人は花に浮れ長閑
な夕方の散歩に夜の歡樂に逝く春を樂しむ時
に我々は一週の中三日はバック臺に他の四日
は出艇してオールも折れよと許り大野川を漕
ぎ上り漕ぎ下り昨年得たる貴き敗因を考究し
て漕法の缺點を補ひ部員養成に努め、かくし
て夕陽既に西に没せんとして薄暮残り少き頃
グレードの先に漂ふ紫金の波に又水音に驚き
て水上に躍り飛ぶ魚にその日の疲勞も慰めら
れて一向「水悠々流れ行く」の歌に勵まれて
歸へる時は既に町は夜の歡樂に生きつ、ある
十時頃であつた。

此の如くして春花薫る五月末競漕大會は長
開けき大野川畔で行はれた。各組レースも接
戦多く最後の對科レースは互に猛練習積みし
甲斐あつて大接戦を演じ僅か一尺近くの差に
て理科の勝となつて盛會裡に終りを告げた。

さて今夏再び京大國際漕艇俱樂部の後援の
下に六高との對校レース行ふこと、なり競漕

大會後直に對校選手をヒツクアップすることになり先輩と相談の結果略々決定を見た際、に當り一大打撃なりし事は昨年の對校選手の手藤松磐石君の病寃の襲ふ所となりたる事にして君は最初より對校選手の重鎮として殊に今年は整調と云ふ大役に決定し大に期待せしに拘らず終に再び起つ能はず涙をのんで選手を辭するに至つた。爲に再び先輩との相談の結果時出弘儀君に切に願ひその承諾を得て選手の見送り。メンバー次の如し。

- C 海内要道 理三 21 五〇〇 一五・〇〇〇
- S 矢坂留治 理二 21 五〇〇 一六・七〇〇
- 5 時田弘儀 理二 20 五・五五 一八・六〇〇
- 4 近藤正造 理二 22 五・七三 一八・六五〇
- 3 水谷龍 文三 22 五・七〇 一九・〇〇〇
- 2 増田音次郎 理一 20 五・七六 一八・六〇〇
- B 三輪勝治 文一 19 五・五五 一六・五〇〇

右の次第で随分大きいクルーである。高等學校クルーとしては體の点では恐らく申分はなからうと思ふ。京大選手舟木氏其他の人も立派ですれ云はれた。こゝに新なる陣容整ひ先輩齋藤卓兒氏コーチの下に新オール到着と共に猛練習を開始した。然るに一難去つて又一難専任コーチャー齋藤氏の東大選手に推され監督景山氏來澤の上我々の意見を聞かれ

た。我々は今年に背水の陣を敷きたる時に思つたが熟考の上先輩東氏とも相談の上終に齋藤先輩をお断りするに至れり。

さて光陰は矢の如く行き六月も早や過ぎて七月に入つた。レースは近付く試験さなる練習は一日たりとも忽せには出来ぬ我々は出来る限りの精力を搾り抜いたのであつた。試験中はバック壘に三百本を引き試験終らうすると共に一同大野に合宿した。同時に一高出身にして現東大選手たる新コーチャー加藤城、翠川潤三兩氏齋藤氏と共に來られ愈々本練習は始まり二週間暑さと戦ひ風や雨に打ち勝ちて來るべき戦のために備へた。選手一同皆研究心に富み殊に初陣の増田、三輪よく奮選手に位して、往々にして選手間に存在する意志の疏通を缺けたる様な點もなく合宿生活も頗る愉快な氣分に滿され何よりの強味を加ふるに至つた。コーチャーの熱心な策を得たる御指導の下に我々は自然の大きな懐に抱かれてあの野の流の様に流れて盡きざる努力さ、あの大空の様に廣く忍従の心を以て二週間男としてオアスマスとして本當に氣持のよいオールの響に浸つたのでした。

かくして我々は七月二十二日午前九時半諸先生校友諸兄の御見送の中に洛東の地に出發

したのであつた。こゝに一言したきはレース期日取決めの爲に上落し六高側と打合せ歸澤したるに交渉不備の點より幾多の曲折を重ねて期日決定せず爲に終に出發前日を以て期日場所を御知らせしたることは衷心遺憾とする所にして北辰會各位校友諸兄に深くお詫び致すと共に御見送のこゝ厚く感謝する次第です。

我々は七月二十二日夕笹川、古川二先輩出迎への中に洛東大津の地に一步足を踏み入れた時潑刺たる希望は如何程赤く燃えたことであつたらう、三井寺下の住吉屋に合宿し先輩の御助力に一層勵まされ二週間の練習に得た貴き経験をこゝ迄も磨き上げる爲に努力に努力をした。

單調な周圍に育てる我々は琵琶の湖水のあの澄みきつた空氣と水に身心共にキレイサツパリ洗ひぬぐはれて朝に樂の音に伴ふ遊覧船の落ち行く先を眺め夕に比叡の雄姿を賞ふて漕ぎ歸へる我等、そしてこの琵琶の清水に男の限りを盡して奮闘する我等は何と愉快なことであつたらう。

我々はコーチャー先輩の下に心地よき團結と砕いても砕けぬ鐵より堅い決心を以て腕を鍛へ他校選手に練習に勵まれて一段と凄味を加へたのであつた。時に二番増田フルンケル

に惱されしに拘らず。よく忍びてベストを盡しヌレースコース引きたる際五番時田袖手三輪其他選手の倒れしこ一度二度ならず、清新の氣艇に漲り意氣天に沖し必ずや昨年の恥辱を雪ぎ永久の榮を築くものさ心緒に期して居つた。

戦の日たる八月二日は終に來た。朝來よく晴れて何等の不安なし。選手一同オールを肩に先輩應援諸兄に護られて審判官の下に到る。審判長大國氏の簡單なる注意を受けて直に乗艇すウオーインガアツプの後兩艇拍手の中にスタートに向ふ。時に天氣晴朗にして波高く兩艇スタートを切りし時は薄暮尙比叡おるしの風に波荒る、午後四時二十四分。戦の幕は切つて落された。コースは石場場直線千三百米、彼は青鉢巻我は赤鉢巻、石場濱は我應援旗を打ち應援船又七百米以下に並びて堂々洛東の地を歴したる感ありき。思へば一年間鍛へし腕を發揮すべきは此時ぞと選手一同一本／＼ガイ／＼さ力の入つた強いオールに満身の魂をこめて漕ぎ出した。最初敵艇

迂りよく我は五本目より調子よく彼は二十八我三十のヒツチにて引き一本／＼敵をリードし七百米にては丁度一艇身彼に先じて居たが彼の艇速の鈍れるに乗じこのチャンスに捕へ

得意のスタート二十本をかけよくその効を奏し見る／＼三艇身近く彼に先づるに到つた時に彼はヒツチを上げ出し猛然として迫り來るその物凄さ敵ながら天晴れにして感歎の辭を惜まず。されど大勢既に定り我のラストスタートに終に如何さもなす能はず我は一艇身餘先じてゴールに入る。タイム六分十五秒五分ノ二なり。然して七高對八高レースは八高の勝となりタイム我より二秒早し、これコンデ

イションの頗る異なる爲にして我の時斜の強逆風彼の時は殆んど無風にして鏡の上を走るが如き時なるこゝを一言辯明して置く。あ、戦は終つた、かくして我々は勝利の榮冠を獲得したのである。願れば我漕艇部は呱呱の聲をあげて五年目大海に出づること三度目にして始めてその名は聞より明みに出て光輝を發するに至れり。併して我々は遠くは壘堤の怨を近くは瀨田の怨みを晴し四高漕艇部の歴史に榮ある勝利の清き一頁を加ふるに至れり。

あ、何たる痛快事ぞや、あ、何たる喜しき事ぞ。我々は荒木京大總長より榮の花輪を手づから賜り一同感激に満ち／＼ぬ。それより七高對八高レースを見て「水悠々」を高唱しつゝ合宿に引上げし時は既に夜の序

幕は開かれて三井寺の晚鐘も我を祝ふかの如くに聞えた。あ、我々は勝つたのだ、然も始めて勝つたのだと思へば萬感胸に迫りて唯感激の涙に咽ぶのみ。その夜の視勝コンパでは徹底的に騒いで終に宿の床を抜いた程我々は嬉かつたのだ。

これ陽には無經驗にして無鐵砲な我々に對する加藤翠川二コーチャーの名コーチ名策戦に長岡部長齋藤笹川其他諸先輩の熱心な御助力さ陰には北辰會各位校友八百諸兄の絶大な御援助の然らしむる所にしてこゝに我々一同滿腔の誠意を以て感謝の意を表する次第なり。

あ、榮ゆるもの久しからず衰ふるもの必ずしも消滅せず、古人云ふ「勝つて兎の緒を締めよ」さ我々はこの勝利に酔へるものに非ず否酔ふべき勝に非ず。此機會に我々は益々倍舊の努力を以て來るべき年の勝利に備へると共に我四高漕艇の基礎を益々鞏固ならしめ清き歴史を永久に傳へ以て天下に覇たらんことを期す。

あ、北辰會各位校友八百諸兄よ、ごうか大いに叱咤鞭撻せられんことを切に望みて止ま

次に十月七日部主催の各學年クラス優勝レースを行ひ最後に各學年優勝クラスの優勝レースを行へり。當日秋晴れの絶好のレース日和にして時習察對察レースもありて盛會裡に終れり。

次に經過を述べん。

コース六米百

第一回 文一甲對文二丙 文一甲の勝

タイム四分

第二回 理一甲對理一乙 理一乙の勝

タイム三分五十七秒五分ノ二

第三回 文二甲對文二乙 文二乙の勝

タイム三分四十九秒五分ノ三

第四回 文三甲對文三丙 文三丙の勝

タイム三分五十一秒五分ノ三

第五回 理一乙對理一丙 理一乙の勝

タイム三分五十六秒五分ノ三

第六回 文二乙對理二丙 文二乙の勝

タイム三分五十八秒五分ノ四

第七回 理三甲對文三丙 理三甲の勝

タイム三分四十五秒

第八回 理一乙對文一甲 理一乙の勝

タイム三分五十二秒五分ノ三

第九回 南寮對北寮 北寮の勝

第十回 二年優勝者文二乙對三年優勝者理

三甲

三年スタートより迂りよくカーブ迄に一艇身を抜く二年ヒツチ上らず疲弊してラスト利かず終に三年艇三艇身餘先んじて悠々ゴールに入る。

第十一回 中寮對北寮 中寮の大勝

第十二回 一年優勝者理一乙對三年優勝者

理三甲

此レース程力の入りしものは珍しい、何ぶん力は五分五分、新進一年勝つか老巧なる三年勝つか多大の興味を以て迎へられた。スタートを切るや兩艇共に迂りよくミドル迄殆んど並行しミドルより三年艇僅かに先じたるに一年艇猛然と肉迫して終に之を抜き急ヒツチにて先んず、三年艇ラストへビーをかけしも僅か一本おかれて五寸許りの差にて敗れたりしは残念至極然して一年の勝は實に天晴れ、尙今後の奮闘を望む、フンティション東北の風強し、タイム三分三十三秒五分ノ二

最優勝クラスのクルーメムバー左の如し。

- C 本田他喜男 3 中辻勝正
- S 西川武之助 2 田中秀二
- 5 牧野八郎 B 北 猛

編輯について

もうこの一年も暮れる。

今號は色々の計畫があつたが、金澤にゐるさいふ理由で皆流れてしまつた。そして四つの理由で短歌號を出すことにした。それについて歌稿を下まつた先生や先輩のお方に感謝します。

歌稿はづつと前に受けまつたのだが、小木曾君が十一月二十七長野で永眠された。遺稿とことばはつたもの、多分絶筆ではないかと思ふ。何しろ四高短歌會がこんなに盛になつたのは、ひとへに小木曾君の熱心のためであつたといつてもいいと思ふ。あのマントに帽子をつけて、静かにあるいてゐた君の後姿を憶ふ。

カツトは全部中野君に彫つて貰つた。

短歌であるため特に注意をしたのだが、校正刷原稿が、どう血迷ふたのか、あちこちを轉々として、私が校正しなかつた。それでかなりの組直しと損害を與へた。誤や感の悪いところがあつたら勘忍してくれたまへ。尚色々明治印刷に迷惑をかけた。

4 岩城鹿十郎

尙當日武藤先生始め多數の應援諸兄來られ、オート熱の漸次盛んにならんとするは誠に慶賀の到りなり。(河内生)

三學期も必ず雑誌を出す。第九十九記念としてかなりのものを出したいと思ふ。あまり長くない、いゝ原稿が集まる事を望む。(そして今度集まつた二三の原稿は私があづかつておきます。)それについて原稿用紙は出来るだけ四百字詰のを使つてほしい。宮地の原稿用紙が、あらゆる点で適當と思ふから、なるべくあれに統一してほしいと思ふ。

締切は二月五日まで、締切は厳守してほしい。

來三學期の初ころ雑誌部の方で何處かいところ、講演會をひらきたいと思ふ。誰か引つばつてきたいのだけれど、金がない。もし日がきまつたら聞きにきてくれ給へ。

今日は、朝からの天氣でこの空の青さはなんといつたらいいか。雀がたえず鳴いてゐる。手風琴の音が聞えて、消えてゆく。突然どんがなる。(十二月二十日、内方記)

大正十一年度北辰會費收入支出決算書

科目區分	豫算額	決算額	増額	減額	殘額
第一款 經常收入	五,五五〇,〇〇〇	五,四五一,一〇〇	〇	〇	一〇〇,八七〇
第一項 特別會員寄附	五,〇〇〇,〇〇〇	五,〇〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第二項 通常會員會費	四,〇〇〇,〇〇〇	四,〇〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第三項 入會金	五,二〇〇,〇〇〇	五,一六〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第四項 預金利息	七〇〇,〇〇〇	五,一六〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第二款 用途指定寄附金	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第一項 特別會員用途指定寄附金	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第三款 臨時收入	七,六〇〇,〇〇〇	七,五五〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第一項 資金受入	七,六〇〇,〇〇〇	七,五五〇,〇〇〇	〇	〇	〇
收入合計	六,四三〇,〇〇〇	六,三三二,一〇〇	〇	〇	九七,九〇〇
第一款 經常支出	四,五七七,〇〇〇	四,五五〇,〇〇〇	〇	〇	二八,〇〇〇
第二項 講演部費	一,一〇〇,〇〇〇	一,一〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第二項 音樂部費	六,〇〇〇,〇〇〇	六,〇〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第三項 雜誌部費	三,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第四項 弓術部費	三,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第五項 劍道部費	七,七〇〇,〇〇〇	七,六〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第六項 柔道部費	四,〇〇〇,〇〇〇	四,〇〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第七項 野球部費	五,元,〇〇〇	五,八〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇,八〇〇

第八項 庭球部費	四三〇,〇〇〇	四三〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第九項 旅行部費	一〇八,〇〇〇	一〇八,〇〇〇	〇	〇	〇
第十項 漕艇部費	四三〇,〇〇〇	四三〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第十項 競技部費	二九七,〇〇〇	二九七,〇〇〇	〇	〇	〇
第十一項 特別大會費	二二二,〇〇〇	二二二,〇〇〇	〇	〇	〇
第十二項 春季運動會費	一〇七,〇〇〇	一〇七,〇〇〇	〇	〇	〇
第十三項 秋季運動會費	三六六,〇〇〇	三六六,〇〇〇	〇	〇	〇
第十四項 秋季運動會費	一〇七,〇〇〇	一〇七,〇〇〇	〇	〇	〇
第十五項 會務費	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第二款 豫備金	三七八,〇〇〇	三七八,〇〇〇	〇	〇	〇
第三款 積立金	三九二,〇〇〇	三九二,〇〇〇	〇	〇	〇
第一項 野球場改修積立金	四二〇,〇〇〇	四二〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第二項 庭球場改修積立金	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第三項 庭球場改修積立金	二四〇,〇〇〇	二四〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第四項 庭球場除雪費	三八,〇〇〇	三八,〇〇〇	〇	〇	〇
第五項 用途指定費	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第一項 運動會用器具補充費	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第六項 臨時支出	一,一七〇,〇〇〇	一,一七〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第一項 トラツク新設費	九七〇,〇〇〇	九七〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第二項 コート新設費	一五〇,〇〇〇	一五〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第三項 立札費	七〇,〇〇〇	七〇,〇〇〇	〇	〇	〇
支出合計	六,四三〇,〇〇〇	六,三三二,一〇〇	〇	〇	九七,九〇〇

注意

- 原稿は四百字又は二百字用紙に認むべし
- 佐原の種類は作者の自由たるべし
- 締切期日は確守すべし

大正十二年十二月二十二日印刷納本
第九十八號
大正十二年十二月二十五日發行

【すら實に市】

編輯兼發行者 吉村政行
石川縣金澤市早通町五十六番地
印刷者 大村重松
石川縣金澤市高岡町九十番地
印刷所 明治印刷株式會社

發行所

第四高等學校北辰會

第四高等學校北辰會雜誌

大正十二年十二月二十二日印刷
大正十二年十二月二十五日發行

第九十八號

